



寄書

お寺まゐりの婦人と子ども

岩手 凹 凸 子

しろがれもこがれも玉もなにせんに

まされるたから子にしかめやも

かういふ貴い子實を専育せられるところの婦人諸氏よあなた方は、四月八日のお釋迦さまの誕生日とか、さうでなくとも、盆であるとか、彼岸の中日であるとかいふ御縁日には、お寺へ參つて御先祖のみ靈を拜んだり、或はお年寄り方などは、末來の幸福を祈つたりなどされて、心をなぐさめられるでありますよ、そしてかういふ日には、大抵可愛らしい子供や孫やそれともまた妹なりを連

れられて、楽しくおまゐりをせられるでありますよ、私なども幼ない時などには、お婆さんや、お母さん、さうでなくとも姉さんなどに連れられて一所にいつた事もたび／＼あつたよに覚えて居ります、寺の和尚さまから彼岸團子をもらつたり、お釋迦さまの奇麗な花繪をもらつたことなどありまして、私などは極お寺まゐりをすきでありました、それですから、お寺參りについては、いまだに忘れないで覚えて居ることが澤山あります、その中で、一番面白く、しかも一番恐ろしく感じましたのは、あの地獄極樂のかけ圖でありました。今考へて見ますと、あの掛圖がいかにも小兒を誡める上に好材料であるといふことがわかります。私などは小供の時遊び仲間でも一番きかないあばれ坊主だといはれたほど亂暴であつたそ

ですが、その掛圖の前に來ますと吾れ知らず頭を垂れたことがあつたよゝに覺えて居ります。併し之れは單に私ばかりではないみな同様であらうと思ひます。たとへ一時ばかりかはしれませぬが、この掛圖の前では、慾も得もない、いはゞ悟りを開いたともいひましょゝか、とにかく一種いふにははれぬ奇麗な清らかな、がく／＼しい心がわいて來るといふことは確かであります。殊によく覺えて居りますのは地獄の繪圖で、あの僞りをいつたからといふて鬼が釘拔きをもつて舌を抜いて居る所あの劔の山を追はれる所、竹の鋸で頭から割られるところ、盗み食ひをしたからといふて、人を目方にかける所、火つけをやつたからといふて、火あぶりをされる所などであります。あれは生きて居るとき、わるい事をしたために、死

んでから赤鬼や黒鬼などの住んで居る地獄といふおそろしい所にやられてせめられるのであると、和尚さんや、お寺まわりの人たちが、ねんごろに説いてきかせるのでありますから、子供心に露疑はないで眞すぐに信じて受けてるのであります、又智識といひ、經驗といひ、極めて淺はかな子供にもは、どーしても僞りであるとは思はれないのであります、それから今一つ覺えて居りますのは、御釋迦さまの葬式の繪圖でその葬送には、ありとあらゆる生物が、大抵出で居りますが、只一つ居ないのは、猫ばかりであります、之れはお釋迦さまが、お病氣のをり、天からお藥をおこされたのを鼠がそれを運びにいきますと、猫は鼠を捕つて食べたから、夫れで仲間に入れないのであるといふのですが、之れなどは、小供にはどうしても

信じられる話であらうと思ひます。かういうことは小供がだん／＼長じて來ますと、なに之れはわるい事をさせまい方便として、わざとこしらへたものであるといふことは、わかつて來ますけれども、しかも之れがわかつたからといふて、別に本誌第九號に載せられた高木先生の所謂母の言葉の見下げたつたらぬやうな考へは起きて來ないのです。之れは私が子供のときを追想していふのでありますから果してあたつて居るか否かはわかりませぬが、かういふところをうまく子どもに呑み込ましたなら確かに之れは小兒教育上妙なからざる功驗があらうと信じて居ります

(未完)

母と子と繼母

五十二

林 壽 祐

天高く地廣く萬物多しといへども、母程戀しく慕しく尊く親切なるは無く子程愛らしく樂しく頼まじきものは無し。假令母が嚴しくあらうとも子が魯鈍であらうとも、其愛情は離なすも離れず切ても切れず、彼の夫婦の情合親しきとか朋友の信義厚しとかいふと雖も、もと／＼骨肉わけての縁故に非らざれば、其親密の度到底も母子の情に及ぶべからず、吾人は深く信ず無形的の親和力に於ては母子の情に比するもの無しと。

夫れ造化の意匠たる、生物を繁殖せしむるに數多の幼稚を數多の母に養育せしむる時は、甚だ不穩且つ不利益なるを以て、各自に已れの産みたる子を保護養成せしむるの性情を賦與したるものな